

つどい

第 453 号
2026.7.1発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

二〇二五年の日本考古学界・回顧と展望

奈良県立橿原考古学研究所

特別指導研究員

森岡 秀人

はしがき

二十一世紀もついに「第2四半世紀期」に突入した。戦後八十年の歳月も駆け足のごとく経った。歴史年表上でも新しいステージを迎えている感がある。コロナ禍後の地球の人間社会はかなり落ち着いてきたものの、地球上では各所で生々しく戦争が起こっており、その行為が本当に無益で人類の後退すら招くことを国家体制や民族を超えて一人一人が胸に手をあてがい考えて欲しい。歴史や考古学を身近に学ぶ私たちは、

人類のたどってきた長い七〇〇万年の歴史を冷静に振り返り、戦争がその歴史の長きにわたる貯え、人間活動の蓄積を一瞬に奪う危機感を一人一人が日々持ち続けて欲しいと願う。

さて、恒例の本会三月例会にお披露目の要旨の脱稿は七十四歳になる誕生日、今年二月二十三日の天皇誕生日に照準を合わせたのだが、年度末の成稿は遅れに遅れて今となってしまった。会長並びに献身的な会幹部の方々に冒頭からお詫びの言葉を述べる次第である。

二〇二五年の日本考古学界・回顧と展望
森岡 秀人

昨年は多くの考古学者が亡くなった。小林達雄・都出比呂志・福井英治・松木武彦・柴田昌児・露口真広・田崎博之……。残念なことであるが、人間の『死』は不公平なく、すべての方々にやってくるものであり、日々前に進まない消極的な『終活』を都合よく待つてくれるものではない。突然を意識しなければならない。

しかし、人間の生きた証しはどの場所にもその足跡をとどめており、私たちはその真相を可能な限り正しく学び、ピントのあった歴史像を結ばなければならない。それはもはや一人の研究者が果たせないのであるが、町医者のような地道な活動が続けてきたので、なんとか今年もこの一年に斬り込んでいきたい。